

38.筆ヶ崎町 (ふでがさきちょう)

天王寺村当時の小字名に由来する。筆ヶ崎の両側は低地(細工谷・金池)になっており、当地域が筆先の形をなした高地であったことによる。

39.舟橋町 (ふなはしちょう)

町名は、もと船走と書かれた。慶長年間(1596~1615)に書かれたと伝えられる三村絵図には船波至と書かれて小字名となっていたことに由来する。『社家注進記』に「下照姫命、天磐船に乗り、此处に到る・・・此舟今なお土中に存す」と記録されていることによる。

40.堀越町 (ほりこしちょう)

天王寺村当時の小字名に由来する。字堀ノ越は和氣清麻呂が計画した運河上にあり、河堀と川底池をつなぐ堀残しの部分にあたることからその転訛と考えられる。



堀越神社

41.松ヶ鼻町 (まつがはなちょう)

天王寺村当時の小字名に由来する。松ヶ鼻は下の大道の西側の上町台地上にあり、高所の端にあたり、かつ松樹の生い茂る地域であったと考えられる。

42.南河堀町 (みなみかわほりちょう)

冠称の「南」は町域を二分した際、南部に位置したことによる。

43.夕陽丘町 (ゆうひがおかちょう)

天王寺村当時の小字名である

夕陽山に由来する。藤原家隆がこの地に来て詠んだ「契あれば難波の里にやどりきて波の入日をおがみつるかな」の入日=夕陽に因なむ。



藤原家隆墓

44.伶人町 (れいにんちょう)

古来からの四天王寺舞楽法要などに奉仕した天王寺楽所所属の伶人八家の屋敷が町域に所在したことに由来する。

45.六万體町 (ろくまんだいちょう)

町名は、聖徳太子六萬體の石の地蔵を造って、この付近に置かれたという俗伝から発生したものである。もとより聖徳太子の時代に地蔵信仰はなかったから、あくまでも俗伝である。

